

「欲」の訓法 追考

― 変体漢文解読のために ―

田中 草大

第一節 変体漢文の言語とその訓法

平安時代、殊に平安後期・院政期（十一・十二世紀）の日本語において、源氏物語などの和文と、漢文に訓点を差して訓み下した漢文訓読文とが語彙・語法などの点において大きな対立を成していたことは、築島裕氏の研究により一般に知られる所となったが、そこに、貴族の日記や種々の文書など主として実用的文章の書記に用いられた変体漢文（註一）の言語を加えて三様に捉えることも一般的になりつつある。平安時代の変体漢文は漢字を専用にして文章を綴ることを原則とし、語順も漢文風に整えてある（峰岸明氏の用語で言うところの「倒置記法」）ことから、一見すると漢文（『中国語文』）のように見えもするが、当時の日本語文に直接由来すると見られる語彙・語法（例えば尊敬の助動詞としての「給」「被」等の使用）や、稀ながら仮名

の混用も見られること等から、飽くまでも日本語文を表記したものとして理解するのが国語史的には常識になっている。

また、漢字表記からは個々の語形が直接には立ち現れて来ないことから、漢字列から意味が読み取れば良かったのであり必ずしも日本語文として訓み下されるべきものではないものではなないかというような疑問も生じ得るのであるが、変体漢文の各々の語の背後に日本語の語形の存することは峰岸明（一九八六イ）、同（二〇〇三）等で主張されており、また稿者もそれを追認する例を挙げたことがある（田中（二〇一三イ））。先述のように和文や訓読文と並び称されることがあるのも、「変体漢文は日本語文に再現可能である」という認識が前提にあつてのものである。

変体漢文を訓み下す、則ち変体漢文の背後にある日本語文を再現するプロセスを「定訓」（註二）という概念を基礎にして体系立てて述べたのは周知の通り峰岸明氏であり、解読にあたって必要とされる手順が峰岸（一九八六イ）第一

部第二章等で具体的に示されている。後の研究者も基本的にそれに則って変体漢文を訓んでいると言つて良く、「基本的に妥当とすべき手続きであつて、踏襲されるべきもの」(山本真吾(二〇〇八))とされている。

しかしながら、現時点での研究成果として、平安時代の変体漢文の全文が確定的に一通りの日本語文として訓めているわけではないし、また訓めるわけでもない。むしろ、変体漢文は「ある程度読めるという」「緩やかな読みの体系」を持った資料として柔軟に扱うべき(堀畑正臣(二〇〇六)十二頁)という理解が現在の主流であると言えよう。

変体漢文内部の漢字字句の訓みが一通りに推定できない要因は(文意が理解できないという場合を除いても)幾つもあり、代表的なものとして次の如きケースが考えられる。

① 品詞が定められない。

(例) 尊重之処…「尊重の処」か「尊重する(せる?)処」か?

② 語種が定められない。

(例) 御遊…オホムアソビかギョウウか? ※また漢語の場合には呉音が漢音かといった問題もある。

③ 語形が定められない。

(例) 風盛吹…サカリニかサカンニか? ※アヤシブとアヤシムの如きものもある。

④ 活用形が定められない。

(例) 入夜馳参、候雲上…終止形か連用形か? ⑤ 所謂不読字の扱いが定められない。

(例) 召人之処…「人を召す処」か「人を召すの処」か?

⑥ 当該字が複数の和訓を持つている。

最後の⑥の場合について聊か詳しく説明する。「盛」字におけるサカリとモルのように、品詞が異なるなど意味の違いが明瞭なものについてはともかく、一字が同じ品詞の和訓を複数持つような場合には特定の文脈においても択一が必ずしも容易でない。このケースは、それら複数の和訓間の意味のズレが比較的大きいもの(⑥甲)と、比較的小さいもの(⑥乙)とに、更に分けることができる。⑥甲の例としては、変体漢文ではないが「不奢^{ルツラコリ}修」(金沢文庫本群書治要巻九 187)のような例が判り易い。「奢」は(清濁や仮名遣いは措くとして)完全付訓となっているが、次の「修」は活用語尾と見られるラしか加点がない。こちらもおゴルと考えるのが自然ではあるが、観智院本名義抄には他にホコルやマサルといった和訓も掲載されており(仏上三十五)、断定は難しい。

また⑥乙の例としては、「等」が挙げられる。

雑人等^ト(享禄本雲州往来 954)

汝等（観智院本注好選・上 3153）

こうした例では、より「定訓」と見なされる方を選択するのが妥当と考えられるが、一定の条件下（例えば右の例では、ナンダチという固定化した語形の存在）で、それとは別の和訓が選択されるというようなことも考えられるため、やはり注意が必要である。

これらには、（A）国語史研究がなお未発達である故に訓めないもの（註三）（則ち平安時代人には常識的に訓めたであろうもの）と、（B）変体漢文という特異なる日本語表記形式が必然的に取りこぼしてしまうもの（則ち平安時代人にも確定的には訓めなかったであろうもの）とが混在していると推定される。例えば④などは、読み手やあるいは書いた本人が後で見返す場合でさえも、どの活用形を想定して書いたのだったか思い出せない、則ち（B）に収まる例が少なくないであろう。この（B）の要素がある限り唯一無二の「訓み下し文」作成は理論上不可能であるが、前者の要素を一つ一つ潰していきゼロに近付けていくことが、変体漢文の言語的性格を探る前提であり、またそのような作業は、変体漢文資料の「訓み下し文」を作成することの多い日本史学のような他分野の学問にとっても有益なことであると考えられる（尤も国語史学の成果が直ちに他分野にも反映されるわけではなく、そうした成果が相互に行き渡るため

の連携が必要であるが）。

本稿で取り上げる「欲」も訓みの定めかねる字として知られたものであり、その要因は先述の分類で言う⑥乙であると見られる。

第二節 「欲」の訓法研究史

必ずしも変体漢文解読を目的としたものではないが、「欲」字の訓法については国語史学上の先行研究が少なからず存する。

早く山田孝雄（一九三五）において「欲」字に願望のみならず将然の用法（後述）があり、古点本では後者についてムトスと訓ぜられているが、後世（恐らくは江戸時代よりなるべきか）とある）には、用法に関わらずホツスと訓ぜられるようになったことが指摘されている。門前正彦（一九六三）でも、古く複数種の訓を有した「欲」が後世ホツスに一元化される旨が述べられているが、各時代の妙法蓮華経の点本を調査し、具体例が多く示されている点に特徴がある。その用例を見るとムトオモフという訓が付されたものが多いが、大坪併治（一九八二）でも「ムトスと讀むのは漢籍で、佛書ではムトオモフと讀むことが多かった」と述べられている（七三五頁）。

小林芳規（一九六七）序章第三節は、種々の点本調査に

より、資料の種類に伴う訓法の違いを提示したことで高名なものであるが、「欲」については、漢籍資料ではマクホツス・コトヲホツス乃至ムトスと訓ぜられるのに対して、仏典と和化漢文（変体漢文）ではムトオモフ乃至ムトスと訓ぜられる傾向を指摘している。また直前の読添え語について「ホツス」の直前の讀添の語は「マク」又は「コトヲ」であり、「オモフ」の直前の語は「ムト」であって區別されているから、「欲」に付訓のない場合にも直前の讀添語の相違によって區別する事が可能である」（一〇二頁）とされる。但し同書ではムトホツスの形もあることも指摘されており、また山本秀人（一九九一）に指摘があるように、久遠寺本本朝文粹などにはコトヲオモフの加點もある為、この「読添語の相違による區別」は訓読語全般について言えるものではない。

峰岸明（一九八六）では、高山寺本古往来における「欲」について、ムトオモフとムトスの二訓があり、前者が一般的であることを述べた上で、後者について「概して言えば、「欲」字の低位にある動詞の漢字表記を音讀する際に採られる訓法のような」（二五三頁）とする。但し同書の別の箇所では「兩者（引用者註、「欲」のムトオモフの加點例とムトスの加點例は）同一の語の表記であつて、右（引用者註、ムトスの加點例）は、訓讀上の不統一に起因するものであらう」

とも述べられている（二三三頁）。

山本秀人（一九九一）、宇都宮啓吾（一九九六）はいずれも日本漢文である久遠寺本本朝文粹を対象とした論考であるが、山本論文は、基本的に同資料の「欲」字の訓法がオモフ系であり、ホツスは少数であることを述べ、且つホツスの加點例の中には漢籍を引用した箇所があることを指摘している。また、宇都宮論文でも、「欲」字の訓法は全体を通じてオモフ系が主でありホツス系は少数であるとするが、ホツス系の使用に偏在性が存する、則ち、仏典型乃至は変体漢文型の訓法と指摘されるオモフ系に比べて漢籍型の訓法であると指摘されるホツス系が（本朝文粹内の文章類型における）公文書の類及び序文の類に積極的に用いられているのに対して、散文の類では少数、また仏教系韻文の類には用いられていないことを指摘している。

田中雅和（一九九二）では変体漢文資料である将門記や江談抄など数種の資料における「欲」の用法が（主に「将」と対比させる形で）述べられており、語義として意志と将然とがあることが判るが、「本稿では訓みについては特に詳細な検討を加えず」という方針であることもあり、和訓の使い分けといった点については明確な言及が見られない。

また宇都宮啓吾（一九九四）では、変体漢文訓点資料である天理本日本往生極樂記において、「欲」は願望の用法でムトオモフ、將然の用法でムトスと加點されていることが

指摘されている（但し例数は各二例に留まる）。

于康（一九九六）では古事記における「欲」字の語義について、本文では意志（話手、動作主どちらも）を専らに担い、将然は「将」字により表現されているが、序文においては「欲」も将然の意味での例があることが指摘されている。

近年の研究では、柴田昭二・連仲友両氏の一連の希望表現についての研究の中に、古点本や変体漢文資料を扱ったものがある（後者に属するものとしては、明月記、御堂閨白記、古事談など）。興福寺本大慈恩寺三藏法師伝を対象とする柴田・連（二〇〇四）では、願望の場合にムトオモフ・ホツスと訓じ、将然の場合にムトスと訓ずると述べられているが、ムトスの加點例に願望のものが本場に無いのかという点についての検討は窺われない。連（二〇〇〇）は明月記の中の「欲」字の用法に焦點を当てた論考であるが、有情物の将然は「欲く之間／処／時」に多いという指摘があり、「時間を表す形式名詞と呼応して類型化の傾向が顕著」とされる。

こうした研究成果を踏まえて、平安時代の変体漢文解説に焦點を当てて、明確にされていない点をまとめると、主に次の二点になると考える。

一 変体漢文でも、他の訓点資料と同様に、将然の用法の「欲」はムトスと訓ぜられるのか。

一 前項が是である場合、ムトオモフは願望として用いられ、ムトスは願望と将然と区別なく用いられるのならば、願望の場合にムトオモフとムトスはどのように区別して用いられるのか。そこには何らかの「棲分け」が存するのか。

第三節 調査及び考察

研究の主眼が変体漢文の言語的性格の解明にあることから、「欲」字の訓法調査に際しても平安く鎌倉初期に訓点が付された変体漢文を主たる対象とした。変体漢文資料は記録・文書・典籍のいずれにも存するが、平安時代の記録資料に訓点を加點したものは知られていない。文書（及びそれに準ずる往来物）と典籍には訓点資料が現存する（使用資料及びその略称は本稿末に一覧）。こうした資料における加點状況を調査することにより、「欲」字の訓法を探ろうと試みた。

なお変体漢文に付された訓点はその文章の「読解」の結果であるから、今回の調査は厳密に言えば、それが「書記」された際の記主の意図した訓みを探ると言うよりはむしろ、

その書かれた変体漢文を、例えば文書の受取手など、「読み手」がどのように解したかということの調査になる。

第三節 第一項 将然の例

以下、調査結果に基づき考察していく。まず前節末で挙げた一点目について検討する。中国語の「欲」に古来、願望と共に将然の語義があることは、牛島徳次氏の『漢語文法論 古代編』（史記・漢書を対象とする）及び『同 中古編』（後漢書・三国志など魏晋六朝時代の文献を対象とする）において、いずれも「欲」は能願動詞（既述の「願望」に相当）と、時態に関する様態副詞（「将然」に相当）との二用法で立項されていることなどから推し量れる所であるが、『漢語大詞典』に「(10) 将要」とあつて後漢書や唐詩の例が挙げられていることから、そのことは確認される。

さて、前節で紹介した于康氏による古事記の調査報告を勘案すると、変体漢文の「欲」字には将然の用法がないことも予想されるが、実際には（同じく前節で示した田中雅和、宇都宮啓吾の両氏の論考で明らかにされているように）変体漢文においても次の如く将然での例が存する。

(1イ) 雖降雨、不幾晴止、其潤不遍、纔殖田、未殖之田皆欲損云々、（左経記・長元五年六月七日）

(1ロ) 而今年大会殆欲断絶、諸国会料庄庄多以顛倒之故也、（興福寺衆僧等申状・保元三年七月・平安遺文2937）

(1ハ) 病焉。露命欲消云々。（類聚本江談抄第六・四十三）

変体漢文訓点資料における将然の例を探した。将然は主体が人間である場合と非人間（動植物）・無生物の場合とに二分されるが、願望でなく将然であることが比較的明確であるのは後者の場合である。八例の加点点例が得られた（いずれも典籍）。以下に全例を示す（註四）。

(2イ) 減身之歎、譬若欲開之嘉禾早萎、将耀之桂月兼隱、（真本将門記495）

(2ロ) 所謂、蘭花欲茂、秋風敗之。（楊本将門記254）

(2ハ) 日欲没時、…（観智院本注好選・下234）

(2ニ) 從蓮中、大蜂飛来、欲差得樂止之目。（金剛寺本

注好撰・中944）

(2ホ) 嘗遇風波、乗船欲没。（探要・上2346）

(2ヘ) 即謂、是例雷欲破塔也。（探要・下243）

(2ト) 数日迷山、身心疲極、況日影欲入、豈堪行步乎。

（探要・下949）

(2チ) 嘗被禁獄、欲命終・時護一心誦観世音経・（探要・下2144）

いづれもムトスと訓ぜられるものであり〔註五〕、先行研究における指摘が変体漢文にも通用することが見て取れる。

ついでながら右の例などより、峰岸氏が述べられた、ムトスが「下位にある動詞の漢字表記を音讀する際に採られる訓法」であるということは、高山寺本古往来以外の資料にまで一般化はできないことが判る。

続いて主体が人間の場合の将然の例であるが、これは願望との区別が非常に困難である。しかし文意・文脈からして以下の十例は将然と見るのが自然と思われる（ロ・ハの主体は鳥）。

（3イ）読書不^ユ息^ス、欲^レ眠^ハ垂^ト以^キ錐^ヲ刺^テ股^ヲ不^レ臥^ス矣、（観智院本

注好選・上676）

（3ロ）尔時有一鳥、至大海浦得^レ一蚌^ヲ蛤^ヲ、欲^レ食^ハ之更堅^シ

不得其内肉身、（観智院本注好選・下3146）

（3ハ）（鳥と雉の間に生れた子は）発声非^ユ雉^ニ非^ユ鳥^ニ、若^シ欲^レ鳴^ハ母音^ヲ其父鳥也、若^シ欲^レ鳴^ハ父音^ヲ其母^ニ雉^ニ也。（観智院本

注好選・下3146）

（3ニ）（在家の法師は）欲^レ云^ハ在家其体法師也。欲^レ云^ハ出家

其行在家也。（観智院本注好選・下3242）

（3ホ）比丘取^レ欲^ハ食^ヲ、即口堅閉不^レ開。（金剛寺本注好撰・

中2171）

（3ヘ）和上云、「…吾将^レ往^ハ行^ハ」。時急^ニ欲^ハ往^ハ。比丘云、「相具^{シテ}種々財^ヲ可^レ参^ル」。（金剛寺本注好撰・中2542）

（3ト）衆生欲^ハ死^ハ於^ニ一事^ニ、其心不^レ著^ス。（金剛寺本注好撰・下5544）

（3チ）衍欲^ハ還^ハ時^ニ、諸仏、化本羽翼^ニ、還^ハ娑婆^ニ。（探要・上14410）

（3リ）（禪師が）将^ハ欲^ハ著^ト・帝…（探要・上1748）

（3ヌ）（老女は）忽^ト爾^ト暴^ス卒^ス。玄孫欲^ハ葬^ハ・死女尚^ハ暖^カ、（探要・下2441）

やはりいづれもムトスと訓んだものと見られる。（3ト）

の「衆生欲死」は文意からして願望とは考え難いものである。（3ヘ）の「時急欲往」は、単なる願望でなく行動に移しているから（それに反応したものとしての）比丘の発話に繋がっていると理解される。（3ヌ）も同様である。

よって主体が無生物・非人間であつて、将然であると明確に判るものや、主体が人間でも文意・文脈によつて将然の解釈が自然なものについてはムトスが選択されているということが窺える。

第三節 第二項 願望の例

続いて、前節末で挙げた二点目について検証するが、ま

ず前提として、現段階の調査からは、ムトオモフとムトスの訳し分けは厳密なものではないということが言えそうである。そのことは次の如き例に明示的に現れている。

(4イ) 昔斑足王子欲登天位、先殺千王頸。(真本将門記 313)

(4ロ) 昔斑足王子欲登天位、殺千王之頸。(楊本将門記 432)

(5イ) 外道身子頭上現大樹欲打摧其頭、毘嵐云風吹他方吹却。(觀智院本注好選・中 1843)

(5ロ) 外道身子頭上現大樹欲打摧其頭、毘嵐云風吹他方吹却。(金剛寺本注好撰・中 1845)

右の如く、同一書・同一箇所「欲」字が、点本により異なる和訓を付されている場合があるのである。将門記の真福寺本と楊守敬本の場合、「欲」についてこのようなケースが七例ある。

よって、変体漢文の願望用法の「欲」字に訳し分けの絶対的原則は無かったと言える。しかし、それでは、変体漢文資料における願望用法の「欲」字はムトスとムトオモフとの訓み替えが読者(乃至記主)によって全くの自由であったのか。そこには原則のみならず傾向すらも無かったの

であろうか。

用例調査からは、必ずしもそうとは言えないようである。まず、願望を示す明確な文意・文脈がある場合にはムトオモフが選択されるようである。

真福寺本将門記の「欲」字はムトスが優位であるが、その中でムトオモフと訓じている全例を次に挙げる。

(6イ) 件介良兼不忘本意之怨、尚欲遂会稽之心。(105)

(6ロ) 妾恒存真婦之心、与幹明欲死。夫則……(130)

(6ハ) 夫則成漢王之励、将欲尋楊家。廻謀之間数旬相隔。(130)

(6ニ) 将門僅聞此由、亦欲征伐。(136)

(6ホ) 同者始自八国、兼欲虜領王城。(315)

比較的、願望であると解釈されやすい例が並んでいるようではある(イ・ロ・ニ)。楊本でもイ・ロ・ホがやはりムトオモフと訓まれている(ハ・ニは該当箇所無し)。但し真本がムトスとするものの方は願望の解釈を招きにくいものであるというわけでは必ずしもなく、実際、真本でムトスと訓じて(対句表現の中で、もう一方でムトスと訓む加点があるので、無加点ではあるがムトスと訓ずると推定される例一例(386)を含む)、楊本にも該当箇所に加点がある

例計十例の内、七例までが楊本ではムトオモフと加点されている（真本と楊本とで加点の異なる七例全てがこのパターンである）。

このことに關してもう少し見ていく。願望の語句と共に起している為に、願望であることが明確なものが四例見られた。全例を挙げる。

(7イ) 養依一人之恩^{ホウハクハニ}、欲遂^{カニ}万衆之交^{フツタムト}、（高山寺^{シヨウ}）(9)

(7ロ) 是故如来告身子^ニ言^{ハク}、「舍利弗^{セリブ}当知^ト、我本立誓願^ニ、欲令一切衆如我等^ニ无異^ヲ……」（探要・上352）

(7ハ) 妙運禪師者^ニ……謂師友曰^ハ、「我以誦經力^ニ、生兜率内院^ニ、欲值慈氏尊^ニ。此願可^{ナラヤ}不^ク」（探要・下541）

(7ニ) 「……願欲聞講說妙法」（探要・下26477）

いずれもムトオモフと訓ぜられている。

またこうした語句の共起はないが願望であるのが明確な例もある。

(8) 弥授^{クシシテ}丁寧誠^ニ欲^ニ被^レ三折^ニ成就之由^ヲ（高山寺^ニ293）

「成就之由」を祈るのは記主ではなく宛先の人物であるので、明らかに願望の意味で「欲フ」を用いている。

これらは、第一項で見た、将然と見るのが自然な箇所では

はムトスが用いられる傾向と裏返し現象であると言うことができる。

第三節 第三項 人称

今回調査した三種の古往来では五十八箇所の「欲」加点例が得られたが、明らかにムトオモフの使用が優勢である。

和泉往来で十九例中十七例、高山寺本古往来で十二例中十例、雲州往来で二十七例中二十一例で、ムトオモフと加点されている。典籍資料でムトスとムトオモフが半々乃至はムトスが優勢であるのに比較すると、顕著な特徴と言うことができる。

これは、古往来が手紙の模範文例集であり、文中の「欲」の主体が基本的に一人称であるからと考えられる。このこととの傍証として、古往来中に加点のある「欲」で主体が三人称かと見られる次の二例（全例）ではムトスとなっているのである。

(9イ) 外村欲^ト争^{ハル} 銚之処清太等願^ニ 目相^ニ叱^ツ、（雲

州844）

(9ロ) 噓嘲興^ニ尽^ニ欲^ニ帰^ニ、（雲州6641）

この傾向を典籍資料でも検討してみる。将門記は全例三

人称であると見られるので使用できないが、金剛寺本注好撰は一人称の例が三例ある。この内(10ロ・ハ)はムトオモフである。(10イ)はシテと加點されており、これがシテの誤点であればムトスの例となり、例外となる(この例については次項参照)。

- (10イ) 為^ニ叶^カ衆^ノ生^ノ樂^ヒ、欲^ヒ出^ト王^ノ宮^ヲ入^リ利^ノ生^ノ道^ニ。(中743)
(10ロ) 吾^レ切^テ千^ノ人^ヲ指^シ、欲^ヒ得^ト王^ノ位^ヲ。(中746)
(10ハ) 常^ニ中^ニ思^フ様^ニ、「…一^ノ生^ノ之^ノ間^ニ、日^ニ々^ニ欲^ヒ奉^ヒ供^ヒ養^ヒ」(中1648)

尤も、一人称以外でムトオモフと訓じた例も五例見られる。これは、この説話において記主が所謂「神の視点」に立っており、自分以外の人物の心内をも把握しているという特別な状況(文書では有り難いことである)に因るものである。

観智院本注好撰では一人称の例が一例ある。やはりムトオモフと訓じている。

- (11) 子^コ思^シ惟^レ「得^テ鋌^ヲ欲^ヒ報^フ父^ノ敵^ヲ」。(上3541)

なお三人称でムトオモフと訓じた例も四例見られる。

続いて探要法花驗記では、一人称の例が五例見られる。(12

ハ・ホ)がムトスである以外はムトオモフとなっている(12ハ)については(10イ)と同様に次項参照)。且つ一人称以外にムトオモフと加點した例はない。

- (12イ) (17ロ) 是^ノ故^ニ如^レ来^ニ告^グ身^ヲ子^ニ言^フ、「舍^リ利^ノ弗^レ当^ニ知^ル、我^レ本^ニ立^テ誓^ス願^ス、欲^ヒ令^レ一^ノ切^ノ衆^ヲ如^ク我^ノ等^ニ无^ク異^ニ」(上342)
(12ロ) (17ハ) 妙^ニ運^ニ禪^ノ師^ヲ者^ニ…謂^フ師^ヲ友^ニ曰^ク、「我^レ以^テ誦^ス經^ノ力^ヲ、生^ル兜^ノ率^ノ内^ニ院^ニ、欲^ヒ值^ヒ慈^ノ氏^ノ尊^ヲ。此^ノ願^ヲ可^ク不^レ」(下541)
(12ハ) 比^レ丘^ノ重^ニ曰^ク、「我^レ今^ニ欲^ヒ還^ル・不^レ知^ル方^ノ隅^ヲ、云^フ何^ヲ」(下9410)
(12ニ) (17ニ) 「…願^ヒ欲^ヒ聞^ク講^ス說^ス妙^ノ法^ヲ」(下2647)
(12ホ) 「…今^ニ蒙^リ聖^ノ人^ノ恩^ヲ、欲^ヒ離^ル此^ノ苦^ヲ。願^フ…」(下2844)

以上より一人称においてムトオモフが選択され易いということが言えよう。古往来においてはこれと裏返し現象として三人称の場合にムトスが選択され易いが、典籍においては必ずしもそうはならない。

なお今昔物語集においても、ムトオモフは一人称の例が二・三人称に抜きんで多く、ムトスは三人称の例が最も多く一人称の例も一定数見られるということが高橋敬一(一九八九)で指摘されている。

第三節 第四項 切れ続き

最後に切れ続きに注目する。「返来申云、『能通郎等佐時家切了、今能通家欲切』者、…驚奏事由并遣右衛門尉維弘・為時等」(御堂関白記・寛弘四年正月九日)のように「欲」を含む文節で文が切れるものと、「天晴、欲参内間、人夢相不宜者、不参」(同・寛弘元年十月六日)のように次の文に続いていくものとがあり、この区別は訓点による語形表示がある場合に一層明瞭であるが、今回の調査からは、ムトオモフは切れる場合に、ムトスは続く場合に用いられる傾向が認められる。

| | 切れる/オモフ | 続く/ムトス | 計 |
|---------|---------|--------|---------|
| 和泉往来 | 16/16 | 2/2 | 18/18 |
| 高山寺本古往来 | 9/10 | 1/2 | 10/12 |
| 雲州往来 | 19/21 | 4/5 | 23/26 |
| 真本将門記 | 5/5 | 5/12 | 10/17 |
| 楊本将門記 | 10/11 | 4/6 | 14/17 |
| 観智院本注好選 | 5/5 | 7/10 | 12/15 |
| 金剛寺本注好撰 | 8/8 | 6/8 | 14/16 |
| 探要法花験記 | 2/2 | 6/14 | 8/16 |
| 計 | 74/78 | 35/59 | 109/137 |

和泉往来では、ムトスの加点例は二例中二例で続いている。ムトオモフの加点例は十六例中十六例で切れている。

高山寺本古往来では、ムトスの加点例は二例中一例で続いている。ムトオモフの加点例は十例中九例で切れている。

雲州往来では、ムトス

の加点例は五例中四例で続いている(なお例外となる切れている一例は、前項にてムトスが出易いとした三人称の例)。ムトオモフの加点例は二十一例中十九例で切れている。

真本将門記では、ムトスの加点例は十二例中五例で続いている。ムトオモフの加点例は五例中五例で切れている。

楊本将門記では、ムトスの加点例は六例中四例で続いている。ムトオモフの加点例は十一例中十例で切れている。

観智院本注好選では、ムトスの加点例は十例中七例で続いている(例外三例はいずれも主体が三人称である)。ムトオモフの加点例は五例中五例で切れている。

金剛寺本注好撰ではムトスの加点例は八例中六例で続いている(この内一例は前項(10イ)。また例外の二例はいずれも将然)。ムトオモフの加点例は八例中八例で切れている。探要法花験記ではムトスの加点例は十四例中六例で続いている(この内の一例は前項(12ハ)。また例外の八例中四例は将然)。ムトオモフの加点例は二例中二例で切れている。

上の表は以上の結果を一覧にしたものである。やはり原則と呼ぶには至らないものの、傾向としては認めて良いものと言えよう。特に、ムトオモフ訓が付された「欲」七十八例中七十四例で文が切れていることが判り、文の切れ目とムトオモフ訓とは強い関連が窺われる。

このような傾向が生じる理由についてであるが、「欲A而

B」のように文中に「欲」が来ると（則ち続いていく場合）、
「A」しようとすると（しようにしたが）Bとなった」のよ
うな解釈を生み易く、文末で用いられるよりも将然的に解
釈され、ムトスと訓ぜられ易いのではないだろうか。

第四節 まとめと課題

前節で述べた「欲」訓法に関する諸々の傾向は次のよう
にスケール化できる。下部の丸括弧の数字は対応する用例
番号である。

十 明らかに願望（ムトオモフ）

- 「願」の如き語句が共起。（7）
- 文脈的に願望。（8）
- 文末に来る。（第三節第四項）／一人称である。（10・12）
- 文中に来る。（第三節第四項）／二・三人称である。（9）
- 文脈的に将然。（3）
- 主体が無生物・非人間。（2）

一 明らかに将然（ムトス）

このスケールの妥当性を検証するために次のような手順
を踏んで例数表を作成した。

ムトオモフ訓が出易いとした一人称の場合を「+1」、ム
トス訓が出易いとした二・三人称の場合を「-1」とする。

同様に、ムトオモフ訓が出易いとした文が切れる場合を
「+1」、ムトス訓が出易いとした文が続いていく場合を「
-1」とする。

これを各々の用例に当てはめると、「+2」「0」「-2」
のいずれかの値を取ることになる。例えば、「子思惟『得銀
欲報父敵』」であれば、「欲」の主体は一人称（+1）
で、文はここで切れている（+1）為、この用例の持つ数
値は「+2」となる。

本稿の主張によれば「+2」の値を持つ用例は極めてム
トオモフ訓が出易く、「-2」の値を持つ用例は極めてムト
ス訓が出易いということになるが、実際に何例がそのよう
になっているかを資料毎に数えた（但し、ホツスの例と、
将然・願望が明確とした（2・3・7・8）の諸例は除い
た）。結果は次頁の表の通りである。

総計を見ると六十五例中六十二例（約九十五・四％）が
符合しており、資料毎に見ても例外はないか、あつて一例
ということが判る。願望・将然に加え、人称と切れ続きが
語形選択に一定の「傾向」をもたらしているらしいことは
充分に窺えるように思われる（註六）。

| | オモフ/+2 | ムトス/-2 | 計 |
|---------|--------|--------|-------|
| 和泉往来 | 16/16 | 0/0 | 16/16 |
| 高山寺本古往来 | 7/8 | 0/0 | 7/8 |
| 雲州往来 | 19/19 | 1/1 | 20/20 |
| 真本将門記 | 0/0 | 4/4 | 4/4 |
| 楊本将門記 | 0/0 | 4/5 | 4/5 |
| 観智院本注好選 | 1/1 | 2/2 | 3/3 |
| 金剛寺本注好撰 | 1/1 | 2/2 | 3/3 |
| 探要法花驗記 | 3/4 | 2/2 | 5/6 |
| 計 | 47/49 | 15/16 | 62/65 |

どうかは、古記録の側に訓点資料が現存しないこともあり、論証の極めて困難な問題である。しかしながら、吉野政治（一九八八）における、「而」の用法が古記録と文書（官符）で共通するとの指摘や、中山緑朗（一九九五）の、「寄事於左右」「事若有実」のような古文書の特徴付けるとされる語句が古記録に見られることを挙げて「基本的な和製漢文体」という土壌は共通と見ることができようか」（一一〇頁）とする等の指摘もあり、基本的な字である「欲」の訓法についても、古記録と文書・典籍とに目立った相違はなかったのではないかというのが、当座の稿者の見込みである。

既述の如く、本稿では資料上の制約により、文書と典籍のみを調査した。よって今回の調査結果を古記録にも敷衍可能かというのが注意される所である。資料によつて同一語の表記に異なりが見られることなどは峰岸明氏・山本真吾氏等により夙に指摘があるが、そういった資料毎の相違が「訓法」にも見られるか

最後に今後の課題について述べる。稿者の当面の関心は平安鎌倉時代の状況にあるが、通史を描くならば山田孝雄（一九三五）や門前正彦（一九六五）にも指摘されている如く、現在の漢文訓読におけるようなホツスへの一元化がいつどのよう^(二五)に起こったかを精査する必要がある。この萌芽のようなものが鎌倉時代には既に現れている可能性を、正応四年本釈氏往来の加^(二六)点状況（ムトホツスの加^(二七)点例が三例ある）や、日蓮遺文に「清澄山に於て仏法を弘め、道善御房を導き奉んと欲す」（文永七年・鎌倉遺文 1076c）とあることは示しているかも知れない。

ホツスについては平安時代においてもその選択基準が問題になるが、今回の調査で得られたのは僅かに四例で、和泉往来、雲州往来、金剛寺本注好撰、観智院本注好選に各一例と、点在している。且つこの内二例は、ホツス訓の選択がむしろ自然である本動詞用法である（ムトスは選^(二八)び得ないし、ムトオモフも不自然）。和泉往来の一例は「長句詩賦吟詠、欲^(二九)閉^(三〇)」(86)というもので本動詞用法が助動詞用法か不明で、且つ本文に疑問がある。残り一例である金剛寺本注好選の例は左訓である（後筆か。右訓はオモフ）。

則ち助動詞用法のホツスについては今回の対象資料にその確例が殆どないのであるが、既述のように、山本秀人（一九九一）において、久遠寺本本朝文粹のホツスの例に漢籍の引用部があることが指摘されている。これにより全ての

例が説明されるわけではないが、ホツスの選択が執筆意図に関連する可能性はある。

稿者は平安時代の変体漢文の言語の性格について同時代の他文体との比較により検討を進めているが(田中(二〇一三イ)ハ)、同(二〇一四)、こうした研究も変体漢文の解説がまずあつてこそである。則ち、本稿の如き訓法研究は、変体漢文の語彙や文体を考究する際の下支えとなるものであつて、その点で右記の稿者の研究と密接に関わるものである。今回は「原則」を見出せず「傾向」の指摘に留まったが、他語の様相等についても猶探つていきたい。

[注]

- (一) 用語・定義に諸説あるが、一般には「日本で著述された、本来の漢文にない表記・語法等(和習)を含んだ漢文」を指して言う。和習の具体的な在り方を御堂関白記から挙げると、①語順、例「来月可_レ有_二行幸_一由被_レ仰」(長保二年二月十四日。本来は波線部と直線部が反転しているべき)、②語法、例「来月可_レ有_二行幸_一由被_レ仰」(同。「被」を受身でなく尊敬の意味で用いている)、③宛字の類、例「糸星見事無_レ極」(長和二年十二月廿二日)、④仮名の混用、例「候_二御前_一間、兵部卿親王_{間諱}枇杷殿おはしぬと云々」(長和四年十一月十三日)等である。
- こうした和習は、単に作者の知識不足に起因する事後的なもの(日本書紀におけるもの等がそれに相当しよう)と、そもそ

も漢字を専用にして日本語文を書き記しているが故の、必然的なものと二分されると考えられ、その後者にあたる「漢字専用で、漢文の語法・文法に基本的には則りながら、適宜和習を織り込んで日本語を表記した文体」が国語史学において扱われる変体漢文の典型であり、本稿でもそのような意味で変体漢文という語を用いる。それらは文書・記録といった実用的な書記の場を中心にして、上代から、いわゆる候文をその末裔として一千年以上も用いられてきたものであつて、日本語史上最も長命の書記スタイルであると共に、現在ではほぼ完全に滅びてしまった書記スタイルでもある。

(二) 「その漢字に對應する和訓のうち、最も定着度の高い和訓のこととで、一般に、その漢字について直ちに想起し得る和訓とすることができであろう」(峰岸(一九八六イ)二九九頁)。

(三) 当然ながら研究の進展により「訓める」ようになった語もあり、例えば⑤で挙げたような「之」は、平安鎌倉時代において不読とするものであったことが小林芳規(一九五九)により示されており、柳原恵津子(二〇〇五)が指摘する御堂関白記の用字法もこれを補強するものとなっている。

(四) 以下、変体漢文訓点資料の用例については、仮名点を片仮名、フコト点を平仮名により示す。また、論旨に関わらない部分で訓点を一部省略している。

(五) ムトスの加点例はいずれもムトホツスである可能性を捨てきれないが、先学により仏典・日本漢文・変体漢文の訓点はオモフ系が中心であることが述べられていること(本稿第二節)と、日本漢文である久遠寺本本朝文料を見ても基本的にホツスの読

添え語はマク乃至コトヲであること、ホツスと完全付訓した例が今回の調査範囲で四例に過ぎないことから、一律にムトスと推断している。なお本稿第四節後半も参照。

〔六〕なお、本稿の二つの表についてカイニ乗検定を行った結果、それぞれ有意水準1%で有意差が認められた。

〔参考文献〕

于 康 (一九九六) 『古事記』に於ける「将」「欲」の用字法

『広島大学教育学部紀要』第二部四十四

宇都宮啓吾 (一九九四) 「天理本『日本往生極樂記』の訓法に就いて

—文章の性格から見た和化漢文訓点資料の訓法に関する一考察—」『鎌倉時代語研究』十七

宇都宮啓吾 (一九九六) 『本朝文粹』訓読における文章様式と訓法

との相関性について—久遠寺本を手懸かりとして—

『大谷女子大学国文』二十六

大坪 併治 (一九八一) 『平安時代における訓点語の文法』風間書房

門前 正彦 (一九六三) 「漢文訓読史上の一問題(五)—「欲」字の

訓について—」『訓点語と訓点資料』二十五

小林 芳規 (一九五九) 「花を見るの記」の言い方の成立追考」『文

学論藻』十四

小林 芳規 (一九六七) 『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の國語史的

研究』東京大学出版会

小林 芳規 (二〇〇一) 「マク・ムト」ホツス(欲)」『訓点語辞典』

東京堂出版

柴田 昭二・連 仲友 (二〇〇〇) 「希望表現の通史的研究 序説」

『香川大学教育学部研究報告』第一部一〇九

高橋 敬一 (一九八九) 『今昔』における「ムト思フ」と「ムトス」について」『活水日文』一九

田中 草大 (二〇一三イ) 「変体漢文の語彙の性格について—文体

間共通語「オドロク」の用法調査による—」『訓点語と訓点資料』一三〇

田中 草大 (二〇一三ロ) 「変体漢文の文体的性格を測る手段につい

て—形容詞ヒサシと形容動詞ワヅカナリを例に—」『日本語学論集』九

田中 草大 (二〇一三八) 「変体漢文の文体的構造についての試案」

第一〇九回訓点語学会研究発表会配布レジュメ

田中 草大 (二〇一四) 「平安時代の変体漢文語彙と和文語・漢文訓

読語の関係について—語義・用法上の相違がある文体間共通語を用いて—」『國語と國文學』九十一ノ一

田中 雅和 (一九九二) 「和化漢文における「将・欲」と「可・当」

等について—(意志)の意味・用法を中心に—」『小林芳規博士退官記念国語学論集』汲古書院

中山 緑朗 (一九九五) 『平安・鎌倉時代古記録の語彙』東苑社

船城俊太郎 (二〇一) 『院政時代文章様式史論考』勉誠出版

堀畑 正臣 (二〇〇七) 『古記録資料の国語学的研究』清文堂出版

峰岸 明 (一九八六イ) 『平安時代古記録の國語學的研究』東京大

学出版会

峰岸 明 (一九八六ロ) 『変体漢文 国語学叢書11』東京堂出版

峰岸 明 (一九九〇) 「古代日本語文章表記における倒置記法の諸

相」『国語論究2 文字・音韻の研究』明治書院

峰岸 明 (二〇〇三) 「古記録の文章における表記とその言語」『國語と國文學』八十ノ一

柳原恵津子 (二〇〇五) 「自筆本『御堂関白記』における「之」字の用法について」『日本語学論集』一

山田 孝雄 (一九三五) 『漢文の訓讀によりて傳へられたる語法』宝文館

山本 真吾 (二〇〇八) 「変体漢文解説の方法と実際——変体漢文訓点資料の諸相——」韓日国際ワークショップ『古代韓日の言語文化比較研究』、後『韓國文化』四十四にも掲載

山本 秀人 (一九九二) 「久遠寺藏本朝文粹清原教隆点の訓法について——助字の訓法を中心に——」『鎌倉時代語研究』十四

吉野 政治 (一九八八) 「官符の文体——而」字の用法について——」

連 仲友 (二〇〇〇) 「明月記における「欲」字の用法について」

『鎌倉時代語研究』二十三

〔使用資料とテキスト〕(一) は本稿における略称

(文書・往來物)

高野山西南院本 和泉往來・文治二年写^(二八三)〔和泉〕…築島裕 (二〇〇四)

四) 『高野山西南院藏本和泉往來總索引』汲古書院

高山寺本古往來・平安末期頃写〔高山寺〕…高山寺典籍文書綜合調査團 (一九七二) 『高山寺本古往來表白集』東京大学出版会

前田家本 雲州往來・享祿二年写^(二五二)※〔雲州〕…三保忠夫・三保サト子 (一九八二・一九九七) 『享祿本 雲州往來』和泉書院 ※

貞和二年写本を祖本とする。

(典籍)

将門記(真福寺本・承徳三年写、楊守敬本・院政期写)〔真本将門記、

楊本将門記〕…共に浦部重雄 (一九八五) 「楊守敬祖本 対照将門

記」(『訓点語と訓点資料』七十五) により、適宜勉誠文庫(真福寺本)、貴重古典籍刊行会(楊守敬本)の影印で確認した。

注好選…(観智院本・仁平二年) 東寺貴重資料刊行会 (一九八三)

『注好選 古代説話集』東京美術、(金剛寺本・元久二年写)

後藤昭雄 (一九八八) 『金剛寺本注好撰』和泉書院

醍醐寺本 探要法花驗記・嘉禎三・四年写〔探要〕…馬淵和夫 (一九八五) 『探要法花驗記』武蔵野書院

※ 訓点資料以外で例に挙げた変体漢文資料 左経記…増補史料

大成(臨川書店)／類聚本江談抄…新日本古典文学大系(岩波書店)／御堂関白記…大日本古記録(岩波書店)

【付記】本稿は平成二十五年東京大学国語研究室会(六月十六日、

東京大学山上会館)における同題の発表を改稿したものである。質

疑応答の場にて鈴木泰、金水敏、石山裕慈の各氏より御意見御質問

を頂戴した。篤く御礼申し上げる。なお本稿は平成二十五年日本

學術振興会科学研究費補助金(特別研究員奨励費、研究課題「変体

漢文を中心とする日本語文体史の研究」)による成果の一部である。

(たなか そうた 大学院人文社会系研究科 博士課程二年)